

小学校高学年に対する

ユニバーサルデザインの指導法・支援法の検討

～すべての児童にとって居心地の良い学級を目指して～

野崎 徹（長崎大学大学院教育学研究科教職実践専攻）

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

1. はじめに

近年、知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒が一定数通常学級に在籍しており、支援を要する児童生徒への対応は学校現場における重要な課題となっている。文部科学省による「通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果」（2012）によると、知的発達に遅れはないものの、学習面又は行動面で著しい困難を示す児童生徒の割合は、6.5%に及ぶことが示された。また、長崎県教育委員会がまとめた「特別な配慮が必要な子どもの教育支援に関する取組～早期からの見守りと継続した支援システムの構築～」(2016年3月)によると、2015年の調査結果から、何らかの特別な配慮が必要と思われる児童生徒の中には、発達障害等があると思われる児童生徒が、小・中学校で7.6%、高等学校で2.3%であると報告されている。

支援を必要とする児童生徒への支援を行う際には「学級全体」という視点が必要となる。しかし、それは特別な支援を必要とする児童生徒に限ったことではないが、現在の学校現場の課題としては、通常学級に在籍している発達障害の可能性のある児童生徒に対しての支援に重点が置かれるあまり、他の児童やその保護者からの不安や不満などが生じ、学級経営上の困難が生じやすい現状もある（村田ら、2008）。そのような現状を踏まえ、本実践研究では、「どの子にも」という視点から「ユニバーサルデザインの指導法・支援法」、そして「居心地の良い学級づくり」という視点から「Q-Uを活用した学級経営のアセスメント」を軸に、実践研究を進めた。

2. 研究の目的と方法

本実践研究では「ユニバーサルデザインの授業づくり」と「Q-Uを活用した学級経営のアセスメント」を軸に実践研究を進め、児童が安心して意欲的に活動できる仕組みづくりを検討したいと考えた。対象学年の選定にあたっては、筆者が学部時代に行った研究をもとに、後年まで印象に残るような荒れを経験することが多いとされた小学校高学年に焦点を当て、児童一人ひとりのニーズを踏まえつ

つ、学級の児童がどの子も安心して学級で過ごせるための学級担任にできるユニバーサルデザインの指導法・支援法を調査・検討することを目的とした。実践方法は、以下のとおりである。

- (1) 対象校：長崎県 N 市内公立小学校
- (2) 期間：201X 年 4 月～12 月（週 1 回）
- (3) 児童：5 年生児童（男児 15 名 女児 19 名 計 34 名）
- (4) 実施方法
 - ①担任教諭及び児童への意識調査
 - ②児童の実態把握
 - ③授業実践（計 4 時間）
 - ・算数「小数のわり算」
 - ・音楽「まちぼうけ」
 - ・国語「大造じいさんとガン」

3. 結果と分析

(1) 「居心地の良い学級」に関する意識調査

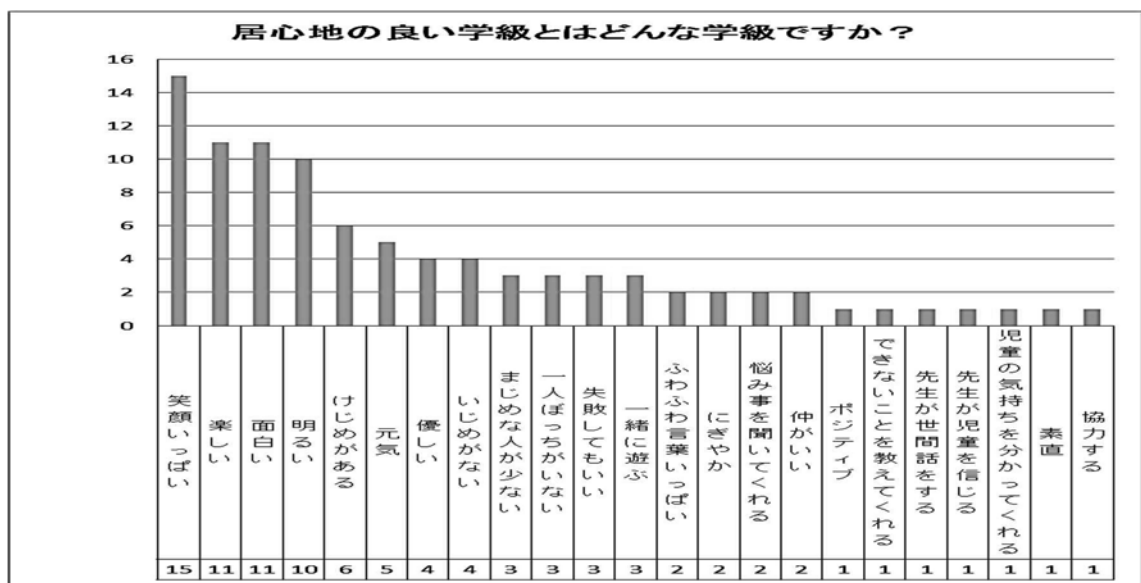


図 1 児童が考える居心地の良い学級

同様の質問を学級担任にも実施したところ、学級担任が思う居心地の良い学級は『児童一人一人が生き生きとして、自由に発言するような場面があっても、傷つける人のいない学級』、そして『笑いのある、笑いの質が高い学級』を目指しているということであった。ともに、『傷つける人がいない、一人ぼっちがない』や『笑顔、笑いがある』というキーワードがあり、居心地の良い学級の考えが双方一致している結果となった。

(2) 「わかりやすい授業」「期待する教師像」に関する意識調査

～KJ法を参考にして～

「期待する教師像」は、「性格的特徴」「関わり方」「指導法」の3パターンに分類することができた。

「わかりやすい授業」は、児童の回答を、大学院生3名（現職1名含む）で検討・分析した結果、以下の4つのグループに分類され、それぞれの内容から「興味関心」「授業の構成」「教師の姿勢」「習熟法」と名付けた。

わかりやすい授業
 興味関心→「絵や図、色を使う」
 「ICT 機材の活用」など
 授業の構成→「練習や復習の時間をとる」
 「手順を示す」
 教師の姿勢→「聞き取りやすい話し方」
 「例やたとえを用いる」など
 習熟法→「分からない時の個別学習」
 「まとめや説明の分かりやすさ」

期待する教師像
 性格→1位「面白い」
 2位「優しい」
 3位「嘘をつかない」
 関わり方→1位「遊んでくれる」
 2位「公平・公正」
 3位「メリハリがある」
 指導法→1位「授業がわかりやすい」
 2位「宿題が少ない」
 3位「字がきれい」

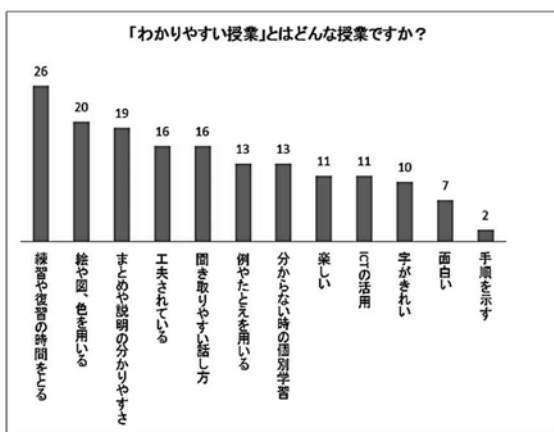


図2 児童が思うわかりやすい授業

図3 児童が期待する学級担任像

(3) Q-U テストの実施

4月のQ-Uテストの結果（図4、表1）と、児童の行動観察から、承認得点の増と被侵害得点の減少のために、学級担任と話し合って以下の実践を行った。

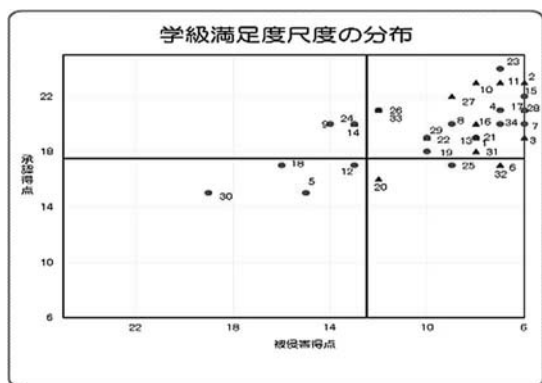


表1 Q-Uテストの結果①（4月実施）

	学級生活満足群	非承認群	侵害行為認知群	学級生活不満足群	
4月次	68%	12%	9%	12%	
	承認得点	被侵害得点	友達関係	学習意欲	学級の雰囲気
4月次	19.5/24.0	9.5/24.0	10.1/12.0	9.7/12.0	10.2/12.0

図4 Q-Uテストの結果①（4月実施）

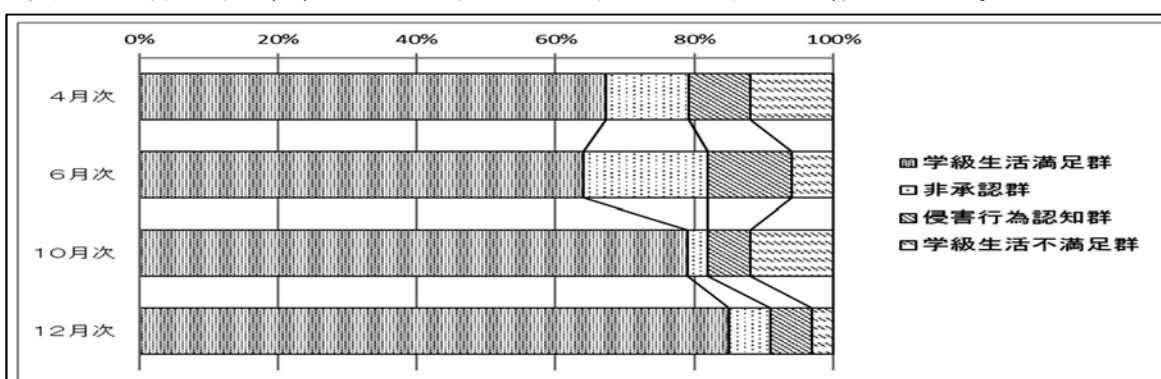
○承認得点の増加のために

- ・学校生活の中で教師が意識的にほめる、認める回数を増やす
「学級全体での話の中で取り上げて褒める、認めること」と、
「その場で、言動を見たときにその児童に対してつぶやきのように褒める、
認めること」の2つの褒め方、認め方の実践
- ・学校行事の係や役割を通して児童の成長を促す
「自分はこういうこともできるんだ」という自信や成功体験を増やす

○被侵害得点の減少のために

- ・手遊びや、話を聞く態度などちょっとしたことも見逃さずその場で注意する

学級生活満足度の所属群の変化は図5のとおりである。4月と12月を比べると、学級生活満足群に位置している児童が68%から85%へと増えていた。



	4月次	6月次	10月次	12月次	全国平均
学級生活満足群	68%	64%	79%	85%	41%
非承認群	12%	18%	3%	6%	19%
侵害行為認知群	9%	12%	6%	6%	17%
学級生活不満足群	12%	6%	12%	3%	23%

図5 学級生活満足度の所属群の変化

次に、「いごちのよいクラスにするためのアンケート」から得られた承認得点と被侵害得点の学級平均の推移は、図6のとおりである。

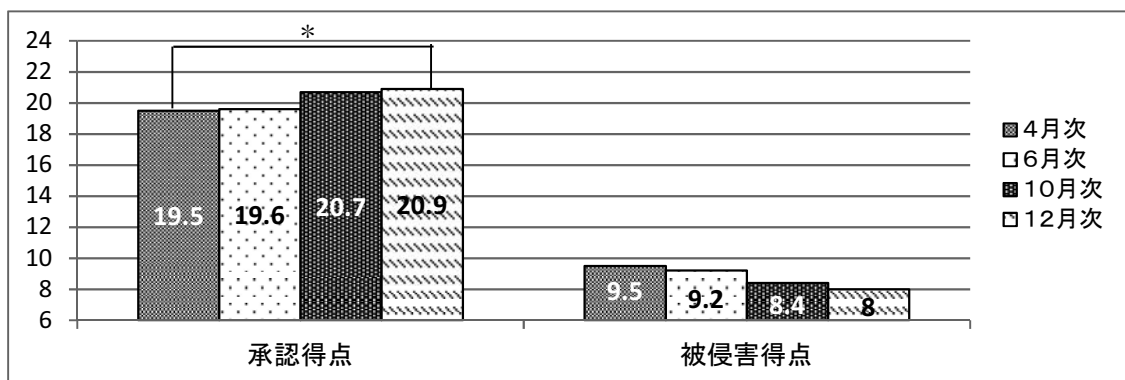


図6 承認得点と被侵害得点の学級平均の推移

承認得点（最大値 24 点）の学級平均が、4 月では 19.5 点だったのが 12 月では 20.9 点と+1.4 点となった。被侵害得点（少なければ少ないほど良い、最小値 6 点）の学級平均は、4 月の 9.5 点から 12 月の 8 点と-1.5 点という結果であった。

最後に、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート」の結果を示す(図 7)。友達関係、学習意欲、学級の雰囲気に関する項目各 3 問はそれぞれ最高 12 点である。友達関係に関する学級平均の得点は 4 月の 10.1 点から 12 月の 11.1 点と+1 点という結果に、学習意欲に関する学級平均の得点は 4 月の 9.7 点から 12 月の 10.4 点と+0.7 点という結果に、学級の雰囲気に関する学級平均の得点は 4 月の 10.2 点から 12 月の 10.8 点と+0.6 点と、3 つとも 4 月より学級平均の得点が増加した。

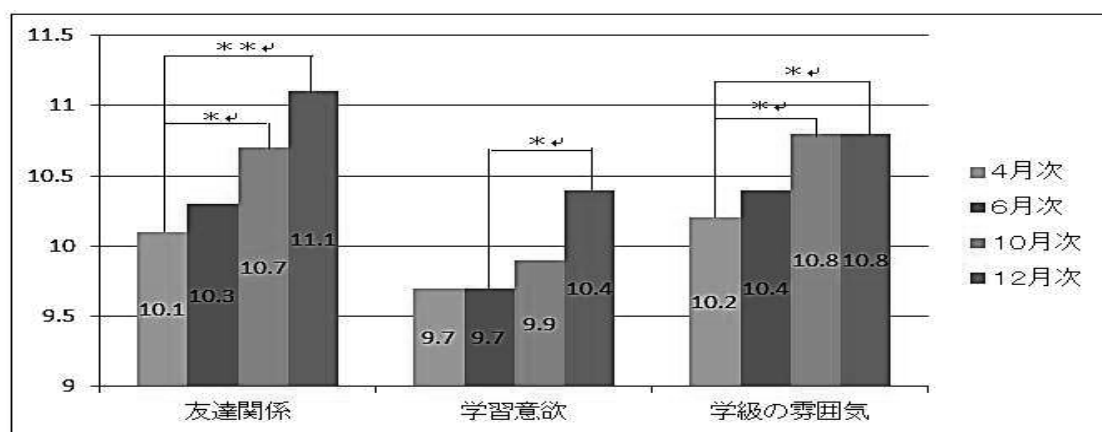


図 7 友人関係、学習意欲、学級の雰囲気に関する学級平均の推移

(4) 授業実践

「わかりやすい授業とはどんな授業ですか？」に対する児童の回答をもとに、授業ごとに実践内容を変えて授業を行った。授業は、算数「小数のわり算」(1 時間)、音楽「まちぼうけ」(2 時間)、国語「大造じいさんとガン」(1 時間) の計 4 時間行った。

算数「少数のわり算」⇒『ICT 機材の活用』

音楽「まちぼうけ」⇒『絵や図、色を使う』、『手順を示す』

国語「大造じいさんとガン」⇒『例やたとえを用いる』

『まとめや説明のわかりやすさ』

① 算数「少数のわり算」

『ICT 機材の活用』をテーマに小数のわり算の仕方をパワーポイントで説明し、いつでも見て確認することができるようにした。小数のわり算の筆算の仕方が電子黒板に提示されていることで、わからない児童はこれをヒントに問題に取り組むことができ、わかる児童も確かめとしてこれを利用して様子が見えた。実際に 33 名中 31 名(約 94%)が「マスターできた」「できた」「わかった」(小数のわり算の筆算の仕方が)と表記していることから結果として現れた。

②音楽「まちぼうけ」

『絵や図、色を使う』と『手順を示す』をテーマに、授業の最初に今回鑑賞する曲のもとになった話を紙芝居形式にし、授業の流れを知らせて児童に見通しを立てられるようにし、ワークシートと同様の拡大した楽譜に児童の気付きを書き込むようにした。児童への事後アンケートから、拡大した楽譜のまとめ方や紙芝居形式、手順を示すことが、学級の87%の児童にとってわかりやすいものとなったという回答が得られた。

③国語「大造じいさんとガン」

『例やたとえを用いる』と『まとめや説明のわかりやすさ』をテーマに、情景描写という児童になじみの薄いものをいかにイメージしやすいものに落とし込んでいけるかを考えて実践した。例やたとえを用いた説明に関して触れた内容の記述は75%ほどあり、その中で68%が「わかりやすかった」等の記述をしている。この結果から、児童は例やたとえを「ヒント」ととらえている様子がうかがえた。その他の意見としては、「もっと先生の考えも混ぜて説明してほしい」や、「言っている意味があまりわからなかった」などもあり、児童の実態に応じた言葉の選び方やたとえなどの課題も残った。

4. 考察

本実践研究は、①児童及び学級担任に対する意識調査、②実態把握からの方針決定、③ユニバーサルデザインの指導法の実践、の3本柱で行った。それぞれに考察する。

① 児童及び学級担任に対する意識調査

まず、学級の児童と学級担任に対し、それぞれに「居心地の良い学級」に関する意識調査を行った。その際、学級担任は同席しなかった。一番多かった意見は「笑顔いっぱい」であった。それに対し、学級担任による回答は「質の高い笑いのある学級」であった。児童も、学級担任も「笑顔」がキーワードになっている結果となった。学級担任によると、「このような学級にしたい」という願いについて、あらかじめ児童と話し合う機会はなかったとのことである。しかし、願いが共有され、同じ方向を向いて進んでいくということは、「居心地の良い学級」を作っていくための第一歩なのではないかと感じられた。

次に、学級の児童に対して、これまでの学校生活を振り返り、理想とする学級担任像と分かりやすいと感じた授業とはどのようなものかを把握するためにKJ法を参考に実施した。理想の学級担任像のベスト3は、「面白い」、「優しい」、「遊んでくれる」であった。児童のすべての回答を分類すると、「性格的特徴(持ち味)」「関わり方」「指導法」に分けられ、学級担任にはこの3つの要素が児童にとって必要不可欠なものであるということが分かった。4月に児童にこのような質問をし、願いをうけとめることで、児童のニーズに合わせた学級担任になることができるのではないかと考えた。また、わかりやすい授業ベスト3は、「練習や復習の

時間をとる」、「絵や図、色を用いる」、「まとめや説明のわかりやすさ」であった。この質問に対する児童の回答は、「興味関心」「授業の構成」「教師の姿勢」「習熟法」の4つに分類することができた。授業一つでも、様々なところにいろいろな工夫をするべきであり、児童もそれを見ていると感じた。特に、視覚的な工夫についての意見が多く、ICT 機材の活用や整理された板書など、目から入ってくる情報が児童にはよりニーズがあるということが示された。

② 実態把握からの方針決定

児童への実態把握の結果をもとに、12月まで『学校生活の中で教師が意識的にほめる、認める回数を増やす』こと、『学校行事の係や役割を通じた児童の成長を促す』こと、『手遊びや、話を聞く態度などちょっとしたことも見逃さずその場で注意する』ことを学級担任と話し合い、継続して実践した。その結果、Q-U の承認得点は有意に増加し、学級生活満足群の児童も 68%から 85%へと上昇した。4月時点でも、全国平均より学級生活満足群は高い割合であったが、12月時点では全国平均と比べると2倍以上の結果となった。4月時点で非承認群や侵害行為認知群、学級生活不満足群に属していた児童が、学校行事(運動会、宿泊体験学習、学習発表会等)での児童一人ひとりに与えられた係や役割を通して、協力したり、励まし合ったり、話し合っって物事を解決したりする経験を積んだからだと考える。運動会の係や出る種目、宿泊体験学習の班での活動や挨拶の係、学習発表会の児童一人ひとりに与えられた役割などをやっていく中で、教師や友達から褒められる、認められることがあって、それが自分の自信や成功体験につながり、その経験から友達を褒める、認めるといった好循環を生み出したことが承認得点の学級平均の増加の一因となったのではないかと考える。また、有意差は得られなかったものの被侵害得点も減少傾向を見せた。観察場面でも、からかいやケンカが減り、そのような侵害行為の減少により安心して学級で過ごせると感じるようになったことがこの結果につながったものと考えられる。話を聞く際の態度や言葉遣いなど、わずかな不適切行為も見逃さずその場で注意し、注意の理由についてもその場で説明することの継続が、児童の「人の嫌がることをしない」といった行動の強化につながったのではないかとと思われる。

③ 授業でのユニバーサルデザインの指導法の実践

今回の実習では、児童の意見をもとに、すべての児童にとってわかりやすい授業となることを目指し、4回の授業を実施した。わかりづらいことが予想される授業の際には、積極的に視覚的な説明の仕方や具体的な例を分かりやすく言葉で伝える等の準備を事前しておくことで、それぞれの児童の理解度や意欲に変化が表れる様子が見られた。その結果、授業の振り返りからは児童の授業への満足度は高い様子が伺えた。

5. おわりに

今回の実践研究を通して得た結果をもとに、居心地の良い学級を作るためのユニバーサルデザインの指導法・支援法として、以下を提案する。

【4月初め】

- ・「居心地の良い学級」とはどのような学級か、学級の児童の考えを聞く
- ・日頃の児童の行動観察やQ-Uテスト等の客観的データの結果から児童一人ひとりの現状を把握し、解決策を考え、実行する

【1年を通して】

- ・学校生活の中で教師が意識的にほめる、認める回数を増やす
- ・手遊びや、話を聞く態度などちょっとしたことも見逃さずその場で注意する
- ・学校行事の係や役割を通して児童の成長を促す
- ・授業の中で、学級の児童がどういう工夫を「わかりやすい」と感じるか試行錯誤し、実践する
- ・定期的にQ-Uテストを実施し、客観的に学級の状態、児童の状況を把握し、改善を図る

引用・参考文献

- 文部科学省（2012）通常の学級に在籍する発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する調査結果
- 長崎県教育委員会（2016）特別な配慮が必要な子どもの教育支援に関する取組～早期からの見守りと継続した支援システムの構築～
- 村田朱音・松崎博文（2008）特別支援児が在籍する通常学級における包括的な学級支援（1）—通常学級における現状と課題—、福島大学総合教育研究センター紀要
- 新村出編（2008）広辞苑第六版（普通版）、岩波書店
- 佐藤慎二・平田真姫・四宮和男・谷順子・太田俊己（2004）通常の学級の授業における軽度発達障害の子どもへの支援—教師の教授行為に着目して—、千葉大学教育実践研究
- 佐藤慎二（2007）ユニバーサルデザインの授業づくりのために、特別支援教育研究
- 村田朱音・松崎博文（2009）特別支援児が在籍する通常学級における包括的な学級支援（2）—雑誌及びアンケート調査にみる実践例の分析から—、福島大学総合教育研究センター紀要
- 文部科学省（2003）今後の不登校への対応の在り方について（報告）
- 柘植雅義編著（2014）ユニバーサルデザインの視点を活かした指導と学級づくり、金子書房
- 河村茂雄・藤村一夫・浅川早苗（2009）Q-U式学級づくり、図書文化社
- 河村茂雄（2012）集団の発達を促す学級経営 小学校高学年、図書文化社